

——権田さんは、平久江さんの2年の先輩ということですが、当時の思い出などはありますか？

権田 そうですね、もう30年以上も前になります。私が1年生の時に負けて2年生・3年生・4年生で勝たせてもらったので、平久江さんが1年生・2年生の時は勝たせてもらいました。

平久江 そうですね。

権田 2年生の頃は、よく試合に出ていましたね？

平久江 はい。

権田 結構強い選手でしたね、まあ私はもっと渋かったのですが(笑)。Hコーチが変わって2番から1番にポジションが変わったりして、大変な時期でしたね。

平久江 当時のHコーチは誰でしたっけ？

権田 畑 龍雄先生(故人)ですね。

平久江 ああ畑先生、コートにボールを置くフォーメーションのですね？

権田 よくわからなくて、難しかったですね。

平久江 あれは難しいですよ、武蔵高校で長らくコーチを務めた有名な方ですね。

阪口 トラベリング等のバイオレーションなど、日本協会ではルールブックを整備もされた方です。

平久江 あと当時、慶應はあまり選手がいなかったですね？

権田 そうですね、伊藤 誠とかの代で、少なかったです。もうあとは、記憶が飛んでしまって(笑)。

——今度は監督として30年越しの戦いになります



慶應義塾大学
阪口 裕昭 H・コーチ

が、どのような思いをお持ちですか？

権田 我々は、慶早戦という呼び方をしますが、やはり「絶対に負けられない戦いだ！」と思っていますし、早稲田は永遠のライバルだと思っています。去年は勝てたのですが、その前の3年間は負けているので、そういう意味ではいま早稲田は2部にいますけど、全く有利だとは思っていないので。とにかく勝たなければならない。春は慶早戦勝利を目指して、これから阪口と鍛えていこうと思います。

平久江 早稲田にとっても同じで、今シーズンの目標としては1部復帰なのですが、それは秋なので、目の前の春ではやはり早慶戦に勝つことです。しかも去年は負けていますし、なおかつ慶應は1部なので、全ての面で胸を借りるつもりとか、チャレンジの気持ちで今年はぶつかっていききたいなど。そして、なんとしても勝利したいと思っています。

——六大学リーグの4試合終了時点での感想は？

阪口 何と申し上げればよいかわかりませんが、まあ「よくみんな一生懸命やっているな」と、そういう感じです。この六大学は、まあ練習試合みたいなものだから、慶早戦本番は「1部も2部も関係ない、本当に何が起るかわからない戦い」になると思うので、万全の態勢を敷いて臨みます。

吉岡 早稲田は、今年スタッフ・コーチ陣が変わって、この六大学ではチームとしていろいろと試していこうと。普段出ている選手も出ていない選手も、「一緒にチームとしてやってきたことをやろう」という形でやっているの、それほど勝敗にはこだわらず内容にこだわっています。今日の立教戦は、いい形がたくさん出たかなと思っています。

——お互いのチームの印象は？

権田 早稲田は、個々人の能力がものすごく高く、「とにかく速い」という印象です。あのスピードにどれだけ慶應のディフェンスがついていけるか？やはり慶應は、そんなに得点がものすごく入るわけではないので、そういう意味ではスピードにどうついていくか、能力が高い選手にどう対応するかが大事だと思います。

平久江 慶應は、バスケのスタイルだけではなく、あらゆる部のシステムが伝統を引き継いで今に至っていて、ある意味羨ましいなど。今年ベンチに入って色々学生と話していても随分昔と変わっていますが、まあ良いところ悪いところ両方あると思うのですが、そういった目で見ると慶應は、伝統を守ってコート上でも普段の生活でもあらゆるものに一本筋が通っているという感じがします。そういう意味では、立派なチームだなという印象を受けます。バスケスタイルとしては、「しっかりじっくりミスなく、そして最後には勝ってしまう」というような、どこをやってもいつも接戦になるような、自分たちのスタイルを貫き通すという印象があります。早稲田の場合は、どちらかというと適当とか、走ってというのが中心になるのでちょっとムラがあって、その部分が違うのかなと思います。

阪口 さっき吉岡さんが言ったように多くの選手が出てきたので、どう機能するのだろうか？と思いました。收拾がつくのだろうか(笑)。6月6日には、「どうなって出てくるのだろうか？」なっている、そんな印象です。

吉岡 慶應は、去年のチームよりも体が一回り大きくなったという印象があります。背の高い選手が多く出てきて、うちは背がそんなに高くないので、そこは早稲田にとって脅威だだと思います。個々の能力でも早稲田より守備の上手い選手や、速い選手が多くいると思うので、そういう中で「早稲田がいかに関心するのだろうか」が、鍵を握っていると思っています。

——今期のチーム作りの方針は？

阪口 まだ練習はほとんどしていないので、なんと言ったらいいかわからないのですが、やはり「学生がしっかり考える」という、そういうチーム作りをいまやっています。そこ大人が考える部分の役割分担の違いみたいなのが、今年は課題かなと思っています。去年は、「自分たちで考える習慣」が一昨年まではあまりなかった事と、自分たちで考えてやるために大人がやらなければいけない部分もあったの



早稲田大学
平久江 卓監督

で、その振れ幅が大きくなってしまった。そこをいいところにもっていけたらなど、今年は思っています。今年はその点では、早稲田も大変かなと(笑)。

平久江 あくまでも学生が、コートでパフォーマンスを発揮することが中心なので、昨年と今年と体制が変わって、「いかに学生が戸惑わないようにするか」を考えています。学生とのコミュニケーションを重要視しているのと、やはり上手い・下手、試合に出る・出ないに関係なく4年生がしっかりとしたチームを作って、「一つのことを考えながらやる大人なチームにしたい」というのが今年の方針です。プレイスタイルは、まだこれからやりながら決まっていくことだと思うのですが、チームの考え方としてはそういった方針にしたいと思っています。

——昨年の早慶戦を振り返ってみていかがだったでしょうか？

権田 ディフェンスを粘り強くしっかりやって、早稲田の今年キャプテンの池田 慶次郎をとにかくみんなで抑えて、ポイントになる選手をみんなでカバーするところがすごく印象に残っています。

阪口 昨年の伊藤たちは4年間で初めて早稲田に勝って、そのあと夏に諏訪に合宿に行ったら、バスケットボール部のOBではない先輩方にも、「慶早戦勝利おめでとう！」って異様にいろんな人たちに言われ、「こうなるのだ」と初めて学生が理解できた。単純に試合やって勝ったり負けたりではなくて、早

稲田のOBも慶應のOBも全国の人たちが、「バスケット部が来るとなると慶早戦はどうだったのか?」と思ってきている。そこで入り乱れて祝福してくれるというのが感じられて、「よかった」という印象がすごくありました。試合自体は、ホームコートアドバンテージがあって、色々なものを感じながら本当に楽しくでき、観客・学生も2千人、3千人集まってくれるのは、「本当に恵まれているな」とつくづく思いました。

吉岡 私は昨年4年生として早慶戦に参加したのですが、私が1年生・2年生・3年生の時は、BチームもAチームも全勝でした。で、自分たちの代になってBチームもAチームも負けというある意味情けない結果となってしまい、なかなか上手いかなかったです。去年は、初めて会場が日吉だったので、慶應の学生がすごく多かった。私たちはそれにビックリで、「やっぱりホームコートだな」とすごく感じ、まずそれに圧倒されて試合という雰囲気より何かのイベントのような雰囲気でした。私たちが考えていたゲームプランが最初からドタバタしてしまい、ずっと慶應にペースを握られたまま「もう気付いたら試合が終わっていた」という感じでした。なので、今年は自分たちのバスケットをすることを一番にし、「慶應がどういうバスケットをするか」というのもあると思うのですが、自分たちのスタイルを出していきたいと思います。

——早慶戦で中心となる選手は?

阪口 みんなですね。早稲田は、あんまり変わらないと思いますけど。今年は、みんなでやるんじゃないですかね。

権田 今日は、山崎が初めてあんなすごいプレーをしているところを見たのですが、ああいうプレーが継続してできるようになれば相当な戦力になると思います。みんな驚いていました。

平久江 誰ということではなくて全員が中心となって欲しいですし、やはりその中でも4年生がどれだけチームを引っ張っていけるかというのが、勝ちにつながるかなと思います。

吉岡 私も平久江さんと同じ考えで、今年は練習も普段コーチ陣が全員集まることがなかなかできなくて、4年生を中心に練習も生活もやっていこうと言っているので、4年生がどれだけ早慶戦に懸ける思いを表現できるかが鍵になってくるかと思えます。

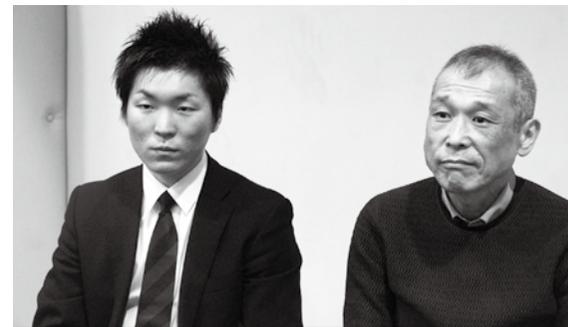
——相手のチームで警戒すべき選手は?

阪口 慶早戦は特別な雰囲気になるので、それでしょうね、敵は。選手を警戒するのは戦術的にやりますが、雰囲気に飲まれないようにする。今年は代々木なので、余計にそこでしょう。人というより学校というか、そんな感じです。

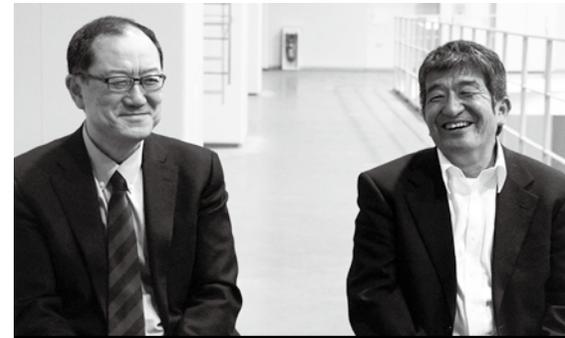
権田 慶早戦は独特な雰囲気なので、「そんなに頑張るな」と言ってもアドレナリン出っぱなしで、それをどうやって抑えて「冷静に自分たちのプレーをやるか」というところが一番難しいので、最大の敵は自分たちです。私も学生時代に早慶戦で、「いつもならないかところに手が出てしまって」ファウルで途中ベンチに下がった経験があります。それを、どうやって選手たちが自分たちで抑えるかがポイントだと思います。

平久江 一人が誰かということではなくてチーム対チーム、慶應カラーと早稲田カラーの激突という感じなので、そのまとまりとか勝とうとする思いが強い方が、最後は勝利するのではないかと思います。

吉岡 雰囲気に飲まれない。そういう雰囲気にはいかに対峙できるかというのが一番かなと思います。慶應は早慶戦ではベンチから出てきた選手がすごく活



早稲田大学
吉岡 修平A・コーチ 平久江 卓監督



慶應義塾大学
権田 哲也監督 阪口 裕昭H・コーチ

躍するというイメージがあって、そういう選手をチェックしないといけないと思いますし、早稲田もそういう選手が出てきて欲しいなと思います。

——早慶戦で注目して欲しいポイントは?

阪口 実は私も指揮をとったのは去年が初めてで、勝つことに必死で。そして、勝った途端にコートに選手がなだれ込んで、審判も困ってしまったという状況でした。早稲田は、3年間そういうところも意識していたと聞いて、「試合に勝って、勝負に負けたな」と言って早稲田側に謝りの連絡を入れました。

今年は、当然勝って格好良く終わりたい。そういうところを見て欲しいと思います。去年は、勝つことに必死でそのまま行ってしまい、恥ずかしい思いをしたので。早稲田がそういうことを考えていたというのを聞いたものですから、結構みんなショックでした。

権田 一生懸命選手たちがやっているの、一生懸命やっている姿から何か感じてもらえるような頑張りをみんなが見せてくれるはずなので、その姿を見て頂けたらなと思います。

平久江 学生たちはお互い必死に一生懸命やっているの、その姿を見てもらって一人でも多くの人が感動してくれればいいなと思います。

吉岡 選手が一つの目標に向かってチームとして頑張る姿を見て、感動してくれればなと思います。

——早慶戦に向けて意気込みをお願いします

阪口 勝つことだけです。

権田 一緒です。

平久江 勝ちたいです。

吉岡 去年負けているので、勝ちたいです。

—今日はシーズン初の対外試合となりましたが、試合を振り返っていかがですか？

福元 早稲田は、「とても速い攻撃を仕掛けてくるバスケット」が印象だったので、それにどれだけついていけるかが、慶早戦の勝利の鍵になってくると思いました。

池田 慶應は、外からのシュートの精度が高く、なおかつリバウンドが強かったと感じたので、早慶戦ではリバウンドの強化をしっかりして戦えたら、と思いました。

—それぞれのチームでは、春休みの練習においてどのような取り組みをしていますか？

福元 私たち慶應は、練習を始めて3日目なので「まだまだシーズンに入って」という話ができないのですが、それでも昨年と同様、負けないようにであったり、慶應らしさであったり、というようなチームとしての目標はあります。

池田 早稲田は、スタッフが入れ替わったので、その部分のコミュニケーションを大事にしています。練習のメニュー自体は、1対1・2対2・3対3・4対4まではやっているのですが、システム自体が変わったのでスタッフ間、選手間のコミュニケーションというのを、重要視して取り組んできました。

—先ほど少し触れられていたのですが、新チームになって変わったことは何かありますか？

福元 私たちはスタッフの構成が少し変わってはいるのですが、基本的に目指すバスケットというのは変わらないのでそこまで変化はないかな、と思います。

池田 早稲田は、スタッフの入れ替わりによってバスケットが少し変わったというのがあるのですが、まだ明確に確立しておらず、私たち選手とスタッフで模索中という段階です。変わったといえば変わったのですが、これからという感じですね。

—新チームになって新しく1年生が入ってきたと思うのですが、雰囲気はいかがですか？

福元 慶應は、現時点(3月中旬)まだ新生が入部していないのですが、基本的に1年生であれ4年生



早稲田大学

池田 慶次郎

慶應義塾大学

福元 直人

であれ垣根のようなものは無くして、常にフラットな状態を私自身含め皆望んでいます。いつ入部してきても、学年関係なくバスケットができる環境づくりはできているかな?とは思っています。

池田 早稲田は、1年生が入部して1週間くらい経つのですが、1週間で非常に距離が近くなりました。最初は、1年生自身が遠慮している姿が見受けられたのですが、日を重ねるごとに積極性が生まれてきていると感じます。私生活においては、寮生の選手が多いのでその仲が深まっており、寮生じゃない選手たちも身近な先輩がいることで、そういった面でチームとして仲良くなっています。

—昨シーズンを振り返っていかがですか？

福元 慶應は、チームとしての最低限の目標を達成できたと思っています。その要因として、堅守速攻が毎試合対応できていたということだと感じています。そこはすごく確立できた部分であり、自信になった部分でもあります。ですから競った試合で、「どれだけ自分たちの力を出し切ることができるか?」に重きを置いてやっていました。

池田 早稲田は、関東大学リーグ1部復帰を目標に掲げてやってきたのですが、入れ替え戦にも出場することができず、結果だけを見ると非常に悔しい1年間でした。ですが、4年生を中心に元気のあるチームでしたし、チームとして結果は出なかったけれど4年生の意志というのを、私たち後輩が受け継いでいるので、今年こそはしっかり体現していきたいと思っています。

—今季のプレースタイルはどういったものですか？

福元 慶應は、パッシングとかドリブルを少なくしていこうと思っています。昨年の流れで強固なディフェンスを組むことが大事で、そこからリバウンドをとって少ないパス、短い時間でシュートにまで持っていこう、ということに重点を置いています。

池田 早稲田は、まだ模索中ではあるのですが、速攻とゆっくりやる、といったオフェンスの中の緩急を大事にしていこうと思っています。常に速い攻撃ではなくて狙える時に速くして、ゆっくり攻めるときはゆっくり攻めて、というのがオフェンスとしてのスタイルです。ディフェンスは、システムが変わったというか1人1人、1対1でやられないようにするというのが根底の部分にあります。

—お互いのプレーの印象とは？

福元 池田は、得点力がすごくあり、空いているとすぐ決められてしまう。かといって詰めるとドライブして、周りの選手を活かされてしまうと思っています。どちらにしてもキープレイヤーなので、慶早戦では要注意でいきたいと思っています(笑)。

池田 福元は、常に落ち着いていて、私とは対照的に

スピードは使ってこないのですが緩急の使い方がすごく上手くてテクニシャンかなと思います(笑)。ロッカーモーションとかでやられる部分があるので、本当にテクニシャンという感じですね。

—オフの日はどんな風に過ごしますか？

福元 定番ですけど「カフェで本を読む」ですかね(笑)。

池田 それ、あんまかっつつかないからね(笑)。

福元 えっと、じゃあバスケット部に限らず色々な友達と話したりして、あえてバスケットから離れています。

池田 自分は、最近は就職活動です。日頃は練習があるので、その分オフでやらないと厳しいので。

福元 いや、私も遊んでいるみたいになっていますが、就活もしていますよ(笑)。

—お互いの学校で仲のいい選手の方はいますか？

福元 慶次郎もそうですし、高校時代から対戦してきた選手が多いので、そういう意味で仲良いというか顔見知りですときている感じです。

池田 そうそう。会場で会ったら、「よっ」って挨拶する感じ(笑)。

—昨年の早慶戦を振り返っていかがですか？

福元 いやもう、嬉しいしかない感じでした(笑)。私も入学して初めてだったし、やっと勝てたなど。まあただ勝ったと同時に、「来年やばいな」とは思っていました。勝たなきゃな、と。

池田 私は、言葉にできないくらい悔しくて、しかもホームはせこいなって(笑)。

福元 まあね(笑)。



池田 なんだよ、これって(笑)。でも今年は代々木でできるので、とにかく負けたくないなと思っています。また、昨年の早慶戦は自分が調子悪くチームの足を引っ張ってしまったかと思っていて、負けた時点からずっと今年の早慶戦の事は意識しているので、何が何でも勝ちにいきます。

——勝ちに行くにあたり、自分のチームでキーマンになる選手は誰でしょうか？

福元 個人的に言えば、大元ですね。彼は、間違いなく外せないです。あと、私たち4年生全員が間違いなくキーパーソンになると思うので、どれだけ明確な目標と意思とあと覚悟を持って臨めるかが、勝負になると思います。

池田 早稲田は今年、AチームとBチームというのをなくしたので、そういった意味でも選手一人一人がキープレイヤーというか、重要になってくると思います。試合に出ているメンバーはもちろんのこと、出られていない選手も何かしらで貢献できるようにと日々考えているので、全員でバスケをするということが重要になってくると思っています。その中でも、名前を挙げるとしたら、早稲田は身長がない分センターにすごく期待していて、特に今年一年での宮脇の成長というのは必要不可欠だと思うので、彼の伸

びに期待しています。

——相手チームで警戒している選手は？

福元 こいつです(笑)。慶次郎です、間違いなく。ゲームコントロールする立場でもありますし、チームの柱でもあるので。あと、過去3年間見ても、彼の活躍で勝敗が決まってしまうので警戒していきたいです。

——では、福元選手にとって三年間警戒している選手は池田選手ということでしょうか？

福元 そうですね。1・2年の時は、先輩もいる中でのびのびとプレーしていて、3年になってそこに責任感が加わった気がします。で、4年目は本当に注意しなきゃなと(笑)。

池田 慶應に限っては、去年は本当に4年生の力が強く、今年もそういうチームを作ってくるのだろうなところから、4年生全員がキープレイヤーかなと思っています。特に大元・黒木・福元の三名は経験を積んできているので、早慶戦では注意しなくてはいけないし、注意してもやられるくらいですごいプレイヤーだと思っています。

——早慶戦に向けてどんな対策をとっていきたいですか？

福元 慶次郎を、おそらく0点に抑えるとかそういう

都合のいいことは無理だと思うので、どれだけ要所で抑えて私たちが流れに乗れるかっていうのが大切だと思います。これから厳密に対策を練り上げていきたいです。

池田 3年間やってきて、慶應のチームカラーというのも分かっているし、個人のプレーの特徴もつかめていると思うので、4年生中心にそういうところを、また1年生を含めたチーム全体に共有するようにしていきたいです。

——早慶戦のここに注目してほしいってところがありますか？

福元 まあ同じだとは思いますが、慶應はやはり勝ちたいという気持ちしかないで、その勝利に向かってお互いのチームの色が出ると思います。あと、早慶戦という独特の雰囲気、私たちがやっていて楽しいし、観客の皆さんも盛り上がると思うので一緒にその場を作ってくれればと思います。

池田 早稲田も同じで勝ちたいという気持ちが強く、更に去年の負けが自分たちの勝ちたいという気持ち

をより強くしているので、本当に気合の入ったチームになっていると思います。

——お二人にとっての早慶戦とはなんですか？

福元 4年目になって、昨年よりもっと早慶戦に懸ける気持ちっていうのが強くなりましたし、春シーズンの1勝分ではないのですが、その1勝が春シーズン、更に1年の全てであると思っているので、貴重だしすごく楽しみです。

池田 自分もすごく楽しみな試合ではあるのですが、年を重ねるごとに早慶戦の捉え方とかプレーの仕方が変わってきているので、さっき福元も言っていたのですが、3年になってすごく責任を感じるようになって、今年は主将として早慶戦を絶対に勝ちたいという思いがあります。そういった意味での責任に、自分が負けないようにしっかり準備していきたいです。早慶で誰よりも早慶戦を大事にする気持ちが、自分は強いと思っているので、絶対に負けたくないという気持ちがあり、そういった意味で気合の入る試合です。

